

---

# 黒翼の天使【新規改正版】

アーチャー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒翼の天使【新規改正版】

### 【Nコード】

N2963Q

### 【作者名】

アーチャー

### 【あらすじ】

これはある少女の物語

少女の住む世界に現れた謎の遺跡

そこで再会したのは消えたはずの相棒

過去の想いを胸に、少女は旅立つ

黒翼の天使【新規改正版】 始まります

## プロローグ（前書き）

モバゲーにて連載している小説の別ver.です

初期の頃の作品のリメイクでもあるのでそこまで自信は無いのですが楽しんでいただければ嬉しいです

直した方がよい場所があったら感想に書き込んで下さい

## プロローグ

- - - s i d e 慧 - - -

私、天野慧（14）は殆どの人が起きていないような冬の薄暗い早朝に森の中を走っていた

何故そんな時間に、しかも冬に森の中を走っているのかと云つと…

この森がある山の山頂付近に急に現れた遺跡に向かっていたの

今はむしろ離れていつてる、何故なら私の後ろには…大きなヒグマが追ってきているから

「つて何で冬の森に熊がいるのよ〜！」

「グルアアアアアアアアアア！！！」

「きゃあああああ！！！」

無理無理無理！熊なんて無理〜！」

そう叫びながら私はヒグマに劣らない速さで山を駆け下りていたすると前方から機械の駆動音をならしながら何か近づいてきた

アムスレイブ

「最小の無人機ASアストラル三機：魔法技術を使われた球形の戦

闘機械ガジェットドローン？四機：魔術で生み出された骨の兵士竜

牙兵三体：計十体が…

チャンス！」

私は全力でジャンプして熊を飛び越え、恐らく私を狙って来たであろう十体の敵に向かわせる

「生き残れたら戦つてあげるわよ〜！」

そう叫びながら私は再び山頂に向かつて走り始めた

『相変わらずですね…お懐かしい』

慌てていたせいか、木の影から私を見ている誰かには気付かなかつた

「ふう…もう少しね」

さつきから三十分くらい走ったら例の遺跡が見えてきた  
後少し走れば到着しそうな距離で、すぐに到着した

「あんなのがまた来たら厄介だし…急がないと」そう言うと私は遺  
跡の中に走っていった

「…普通ね…」

奥まで来てみたけど中は何の変哲もない遺跡だった

だけどよく見ると幾つも窪みがある

「窪みの上に何か書いてあるわね…」

窪みの上には右から『クウガ』『アギト』『龍騎』『ファイズ』『

ブレイド』『響鬼』『カブト』『電王』『キバ』『ディケイド』『

ディエンド』『ダブル』『オーズ』の紋章が刻まれていた

それ以外にも幾つか窪みはあった

窪みの経常からして多分変身ベルトや強化アイテムがあったのだろう

「…ライダー関連以外もあつたみたいだけど…殆ど何も残ってない  
わね」

残念だけど、と窪みを見ながら呟く

『外には出れませんよ』

後ろから聞こえた懐かしい声に慌てて振り向いた

『お久しぶりですマスター』

後ろにはかつての私の相棒…ダインスレイブが浮遊していた「…

ダイイン？」

私はダイインらしき黒い宝石に話しかける

『はい、マスターの相棒のダインスレイブですよ』

ダイインは昔と変わらない声で人間のようにそう言った

「変わってないわね」

『おや？驚かないのですか？』

ダイインが不思議そうに聞いてくる

「驚いてるわよ」

でも私の相棒ならそれぐらい出来て当然でしょ？」

私はからかうようにそう言ってみる

『そうですね』

追跡と転移を駆使すればこの程度余裕でしたよ  
時間はかかりましたがね』

それに返すように言ってくる

「流石私の相棒ね

それで、外に出れないってどう言うこと？」

『簡単ですよ』

さっきの奴らが来てるんです』

「…むしろ外に出た方が良いわね」

『今出ると鉢合わせになりますよ』

「仕方ないでしょ

出ないと袋のネズミなんだし」

言い争いをしていると入り口の方から大きな音…耳鳴りのような音が聞こえてきた

『ミラーモンスターですか！？』

「いえ…山の中だし断続的じゃない

まさか…」

私はダーインを握って入り口の方へ走って向かった

外に出ると空間が歪み、球状の何かに一帯が包まれていた

『これは…スフィアの！？』

「間違いなさそうね

…ダーイン、アイツらは？」

周囲を見渡してから言う

『…既に転移に巻き込まれたようです

もう少しで大規模な転移が発生します』

「…よし、ダーイン」

『何でしょうか？』

「ランダムジャンプ、転移で逃げるわよ」

『ですがマスター…それだと再び…』

「覚悟の上よ

私の旅は終わってないもの」

『…分かりました』

ダーインを手に取り、私達がこの場から消え去る所をイメージするすると私とダーインは虹色の粒子に包まれていく

「行くわよ…」

『いつでもOKです』

「『ジャンプ!』」

私達は二人で声を合わせて転移のキーワードを叫び、別の世界に転移した

T o b e c o n t i n u e d . . .

## プロローグ（後書き）

皆様に一応解説しておきます

ダインスレイブは人間ではなく特殊なデバイスです

デバイスとは、【魔法少女リリカルなのは】で登場する魔法を使う補助をする機械

ダインスレイブはインテリジェントデバイスと呼ばれる有人格型

のデバイスですが通常のインテリジェントデバイスとは少し違います

詳しくは物語の中で語っていく予定です

もしかしたら後書きで語る事になるかも知れません

何はともあれプロローグはこれにて終了

第一話にご期待下さい

## オーズの世界『思い出と破壊者と二人の000』

夢を…夢を見ていた

夢の中の私は赤く染まった廃墟に立ち尽くしていた

それは昔起こった惨劇

戦いの果て、私は全てを失いかけた

仲間も、相棒も、命も

最後に目の前に見えていた物は…聖杯

汚れてしまった万能の願望機

当時、魔導師であり魔術師だった私は…全ての魔力を注ぎ込んで聖杯の一部を浄化した

そうしなければ願いは叶えられなかったし…むしろ間違った形で叶えられていた筈

そこまでして何を願ったのか、何を叶えたのかは思い出せない  
気が付けば私は人生をやり直していた

【生まれ変わった】訳じゃなく【やり直し】

ただ、魔法に必要な魔力も魔術に必要な魔力も、私には残って無かった…いえ、正確には変わらず存在するけど自分では感じられないし使えないだけ

でも私の中に残っていた膨大な魔力は…私と世界の運命を変えていった

そこまで思い返すと懐かしい声が私を呼んでいた

その声のする方へ向かおうとしたその時、急に夢から覚めてしまった  
久しぶりに会えると思ったのに…そう考える私の手には何故かバツクルと機械の本のような物が収まっていた

l i s s i d e o u t l i n e

慧が目覚める少し前、慧の首から待機形態の黒い宝石の状態でぶら

下がっているダーインスレイブは現在の状況を整理していた

『（この場所にジャンプアウトしたのは良いとして…マスターは気絶してしまっている様ですね

魔力量はリンカーコアの魔力も魔術回路の魔力も変わらず存在…あれ？使つて無いのでしょうか？通常以上に溜まってますね…）』

ちなみにジャンプアウトとはこの場所に転移するために使った手段【ボソンジャンプ】の転移先への出現の名称

リンカーコアとは魔法を使うための魔力がある体の一部分、魔術回路とは魔術を使うための魔力を精製して流すための魔術的な体の回路である

存在する場所を分かり易く言えばリンカーコアは心臓、魔術回路は神経だ

『（場所は何処かの研究所の様ですね

マスターの手にあるバツクルは…彼女達に託されたアレですね）』

ダーインは替の手に収まっている物の正体を知っている様で全く驚く様子は無いようだ

其処まで考えた所で丁度替が目覚め、手に有る物に気付く

『お目覚めですかマスター』

「えっ？…ああ、ダーインね」

寝ぼけていたのか呼ばれて少し間を空けてからダーインに気が付く再会してすぐに転移して気絶してしまっていたので仕方がない訳ではあるのだが…

「…ここは？」

『どこかの工場みたいですね  
…この様子では何の世界かは判断しかねますね』

ダーインは周囲の情報、及び自身の考えを慧に伝える  
少なくともダーインの考えは当たり前前の情報だ、工場と言うだけでは何の世界かは予想出来ない

むしろ工場と言うだけで【カプトの世界】や【電王の世界】だと言うならば、それは根拠の無いカンに他ならないだろう

「じゃあ一旦ここから出てみましょうか  
何か有るかもしれないし」

そう言うと慧はバツクルと機械を手に持ったまま工場の入り口に向かう

今いる場所は工場の角、そこまで距離は無いが何かを考えるだけの時間は有る

それ故に…いや、時間が無くても考えたであろう事を考えた

「（この二つの物、どこかで見たこと有るんだけど…何だったっけ？）  
」

考えていたためなのだろう、慧の歩く速度は何時もより遅い  
だからこそ、気付くのが遅れたのだろう…上に誰かがいることに

サイ ゴリラ ソウ

サゴーズ…サゴーズ！

『ッ！マスター！上です！！』

一番早く気付いたのはダーイン、気付いた瞬間に自身の相棒であり

担い手である慧に全力で知らせた  
だからだろう…慧はすぐに反応して後ろに大きく下がり、上から落ちてくる何者かを警戒した  
するとその直後、慧がいた場所に上にいた何者かが降下し、周囲は土煙で覆われた

「何よこれ！」

『大丈夫ですか！』

「何とかね…風もあつたら危なかつたけど」

慧の今の服装は女の子らしい白いワンピースを着ている  
そのため風が吹いていれば服が土で汚れてしまう事になっただろう  
ちなみに慧が気絶していた場所は休憩用の椅子の上だったので汚れてはいない

「いったい誰よ！」

そう言いながら睨んだ先には、一人の仮面の戦士が立っていた  
サイを模した仮面、ゴリラを模した腕、ゾウを模した脚、そして胸部の円形のプレート  
全ての色彩が反転した黒い仮面ライダーオーズ・サゴゾコンボが立っていた

「なっ!?!」

『有り得ない…オーズの様ですが明らかに色彩が違います!』

二人は今まで仮面ライダーの世界に行った事は無く、直接仮面ライダーに会った事も無い

しかし二人は仮面ライダーと言う存在を知っている

慧は自分の世界の特撮や二次創作として、ダーインは自身にインプ

ツト（記憶）された知識として<sup>データ</sup>

それ故に二人は目の前に存在するオーズに驚いていた  
何故なら二人が知る仮面ライダーオーズ・サゴーズコンボのメイン  
カラーは…白だったからだ

「で、でも…知ってる姿と違うからってまだ敵だと決まった訳じゃ  
…」

無い、と言う前にオーズ（？）・サゴーズコンボは自身の胸を叩き  
始めた

…まるでゴリラが敵を威嚇するように

『敵対行動！マスター！』

「くっ…せめてこっちにも戦える手段が有れば…」

悔しそうに言いながら手の内にあるバツクルと機械を握り締めた

「…そうだ…思い出した」

そう言い替はバツクルを腰に当て、ベルトを発生させる

『待って下さい！マスターには使い方は分からない筈「分かるわ！」  
ッ！』

「だってこれ…どう見たってディケイドライバーじゃない！」

確かに替の言う通りバツクルは【世界の破壊者】や【通りすがりの  
仮面ライダー】の通り名を持つ仮面ライダー、ディケイドの変身ベ  
ルトであるディケイドライバーに酷似している  
違いが有るとすれば中心部分のカラーリングだけだ

「もし違うライダーに変身するんだとしても…もし本物じゃないんだとしても！」

そう大声で言いながら機械の中から一枚のカードを取り出し、仮面ライダーが描かれている面をオーズ（？）・サゴーズコンボに向ける

「死なないためにも…ダーインを守るためにも一か八かこれに賭ける！」

叫ぶと同時にカードを裏返してバックルに装填、そしてすぐにバックルを90°回転させる

KAMEN - RIDE DESERT

その音声と共に替の世界の遺跡で見た13のマークを含んだ複数のマークを中心に置いた複数の影が現れ、全てが替と重なる

その瞬間に替の姿が仮面ライダーに変わり、一瞬周囲に無数のカードが現れ、すぐに消える

そして数枚の板のような物が仮面に刺さるように装着されて変身が完了

その姿はディケイドに似てはいるがカラーリングが違い、ディケイドのカラーリングの内、白と黒の色だけが入れ替わった姿だ

この仮面ライダーの名前は…仮面ライダーディセツト

「ディケイドとは少し違う…」

『事情は後で説明します』

基本的にディケイドと同じですから応戦を！」

「ダーイン…このライダーに付いて何か『良いから早く！』は、はい！」

ダーインが何か知っていると思ったデイセットは質問しようとしたが大声で怒られ、慌てて機械：【ライドブッカー】から一枚のカードを取り出してバツクルに装填する

A T T A C K - R I D E    B L A S T

その音声と共にライドブッカーをガンモードに変え、引き金を引いてオーズ(?)・サゴゾコンボにライドブッカー・ガンモードの銃口から光弾を連射する【デイセットブラスト】を放つ

しかしオーズ(?)・サゴゾコンボはカードを使わずに撃つより高威力で有るにも拘わらず怯みすらせず ゆっくりと歩き出した追加で撃ち込もうと再びライドブッカーからブラストを二枚取り出すしかしその内一枚は通常のブラストではなく、スペルが変わっていた

「…ブラストじゃない？」

『これなら…マスター！ブラストをバツクルに装填して読み込ませてすぐにそのカードを追加で読み込ませて下さい！』

「えっ！？う、うん！」

言われた通りにバツクルにブラストのカードを装填する

A T T A C K - R I D E    B L A S T

その音声が鳴り終わると同時にバツクルをカードの装填が可能な位置に回転させてブラストのカードが一時的に消えているのを確認し、ブラストに似たカードを追加装填する

A T T A C K - R I D E    B L A S T E R

ブラスター、音声を聞く限りそれがこのアタックライドの名前のよ

うだ

ライドブッカーをオーズ(?)・サゴゾコンボに向け、狙いを定めて引き金を引く

すると銃口から光弾ではなく光線が発射された

オーズ(?)・サゴゾコンボはその光線を避けようと動くが光線はまるで逃がさないと云うかのように追尾し、オーズ(?)・サゴゾコンボの腹部に直撃した

「まさか…ブラストを収束させた？」

『その通りです、ブラスターは収束砲のアタックライド

追加効果として前後に装填したブラスト系のアタックライドを上乗せで収束させる効果が有ります

それよりマスター、早く脱出をしなければ』

「ええ、もちろん

でも逃げる隙が…」

ブラスターを腹部に撃ち込んだまでは良かったもののオーズ(?)・サゴゾコンボは僅かに怯んだだけで、すぐに体勢を直し直してしまっていた

「このままじゃ…」

『危険…しかも更に敵が現れましたね

ほら、あのオーズ擬きの後ろの方に』

ダイインが言う直前、ちよつと言い始めると同時に入り口から敵が侵入して来た

カザリが作ったであろう猫系&虫系ヤミーのチーターアゲハヤミーだ

「…【この世界】のオーズも来るようだな」

オーズ(?)・サゴーズコンボはそう眩くとメダルを入れ替えて別のコンボに姿を変える

ライオン トラ チーター  
ラタラタ・ラトラーター

本来の音声とは違う声の音声と共に姿を紫のラトラーターコンボに変える

「ハアッ！」

オーズ(?)・ラトラーターコンボはライオンのメダルの力を使い必殺技の【ライオディアス】を放つ

しかし手加減したのか目眩まし程度でしかなく、ダメージは殆ど無かった

「クッ…何でダメージが…」

SCANNING CHARGE!

光に怯んでいるディセット

その間に必殺技音声が流れ、何かが爆発する音が鳴り響いた

しかしディセットは攻撃を受けていない、つまり必殺技を受けたのは…ヤミー

「何よこれ…」

視界が戻ったディセットの目に映った物は…地面に散らばるセルメダルと工場の天井に空いた穴から逃げようとするオーズ(?)・ラトラーターコンボ

「予想以上に見えるようになるのが早かったな」

そう言いオーズ(?)・ラトラーターコンボはディセットを見る

「指示を受けているとはいえ、今の段階で貴様とオーズを相手にするほど暇ではない

悪いが撤退させてもらうぞ」

「なっ!? アンタ…やっぱりオーズじゃ…」

「その通り、我が名は仮面ライダーエンシェントオーズ

ミラージュシリーズの一つだ」

驚くディセットの疑問に答えるように名乗るエンシェントオーズ

「今は撤退するが…次に会った時が貴様の最後だと思え」

その言葉を言い終わると同時に天井から脱出し、既に見えなくなっていた

「…ミラージュシリーズ…エンシェントオーズ…」

『マスター…考えている暇は無さそうですね』

ダーインの発言の直後、工場の入り口から二人の人影が見えた

「あれは…火野映司とアंक…」

人影の正体は本物の仮面ライダーオーズの変身者、火野映司と不完全な復活を遂げて片腕だけになっているために人間の体を借りているグリードのアंक

オーズ本編と同じ組み合わせだ

「あれ？ヤミーはどこだ？」

「チツ、この馬鹿が」

下を見る、セルメダルが散らばってやがる」

「って事は誰かが倒してくれたのかな？」

「それしかないだろ」

だが不自然だ…」

話し合っている映司とアंक

それを見ながらデイセットとダーインは隠れて話し合う

『事情を話して協力して貰うべきです』

「やっぱりそうよね…でもアंकいるし…」

『確かに面倒ですけど…仕方がありませんよ』

「分かったわよ…」

話し合いの結果の通り事情の説明を行うため、変身を解いて映司とアंकに近付こうとするが…違和感を感じて止まる

アंकが地面に倒れているのだ、しかも髪型と髪の色が変わっているその違和感の正体に気付いたのと同時に後ろから何者かの気配を感じ、慌てて後ろに振り返った

そこには宙に浮くアंकの本体である右腕が…

「きゃあああああ！腕怪人く！！」

「誰が腕怪人だ！」

驚いた彗はアंकから後退るように離れ、アंकはそれを追うように近付いていく

「おいアंक！」

慧とアंकに気付いてアंकを捕まえる映司

その間に慧はアंकから離れて深呼吸をして冷静になるうとする

「えつと…とりあえず話を聞いて貰えますか？」

敬語を使って話し掛ける慧

その言葉を聞いて映司はアंकを離して問いかける

「話？」

「はい、それと少し確認を…」 「確認だと？」

倒れていた体に再び戻ったアंकが近付いてきて問いを言い放つ

「ええ、貴方の名前は火野映司…で合ってる？」

敬語を止め、普段の言葉で映司に言う

それと同時に手に持っていたバツクルをしまう

「えっ？そうだけど…俺、君と会ったことある？」

「いえ、初対面よ」

映司の問いを否定する慧

「もう一つ、貴方が【本物】の仮面ライダーオーズ？」

「何で君がそれを？」

「まさかお前…鴻上の所の奴か！」

映司とアंकがそれぞれ反応した所で溜め息を吐く慧

「ハズレよ、腕怪人」

「誰が腕怪人だ！」

「じゃあ何で俺がオーズだって知ってるの？」

「その理由は今から話すわ」

突拍子も無い話だけど…」

そう言いひと息おいでから重要な一言を言い放つ

「私は別の世界から来たのよ」

「えっ……」

しばらくの間、この場に沈黙だけが続いた

T o b e c o n t i n u e d . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2963q/>

---

黒翼の天使【新規改正版】

2011年10月9日22時33分発行